

雑木，インチ材から銘木へ

- 北海道の広葉樹評価の移り変り -

宮 島 寛

雑木とは？

道材が利用され始めたのはかなり古いようである。また、大量に伐採され始めたのも松前藩が創設された頃の様である。津軽海峡を渡って来た船上から道南沿岸にヒノキ（ヒバであるがヒノキのように見えた）の大森林を発見し、岸に近づくと、そこにはニシンの大群があった。これらの資源の管理と開発のため、松前藩が置かれるようになり、道南のヒバはヒノキとして江戸へ送られるようになった。わが国は針葉樹文化の国といわれるように、スギ、ヒノキが主に使用され、広葉樹のなかではケヤキが寺院の太い丸柱や廊下の床板、家具、器具などとして使われ、他の広葉樹はかなな台、器具の柄^えなどのカシ、箆^{カス}のキリというような特殊なもののみであった。酒も西洋ではナラの樽^{たる}に入れるが、わが国ではスギ樽である。そして、大部分の広葉樹は雑木といわれ、薪炭材^{しん}として扱われてきた。

ここで、「雑木」を辞典で調べてみた。

岩波書店の広辞苑では

ぞうき〔雑木〕良材とならぬ種々雑多の樹木。

薪材^きなどにする木。ざつぼく。ぞうぼく。

同じ岩波書店の国語辞典では

ぞうき〔雑木〕材木としては役に立たないような粗末な木。薪にする種々の木。

小学館の国語大辞典では

ぞうき〔雑木〕いろいろの樹木。また、用材にならない木。ぞうぼく。ぞうもく。

ぞうきばやし〔雑木林〕種々の木が入れまじってはえている林。

講談社の国語辞典では

ぞうき〔雑木〕（名）1. 良材とならない、そまつな木。たきぎ・炭などにする木。2. 種々まじって、はえている立ち木。

研究社の和英大辞典では

zoki [zo 'oki] 雑木 n. miscellaneous trees. ~林 a thicket of assorted trees : a copse ; a coppice. ~下駄 cheap geta.

これらの単語を同じ研究社の英和大辞典により引けば、miscellaneous = 種々雑多な、雑多な物から成る、寄せ集めの、tree = 立ち木、樹木、きょう木、thicket = やぶ、茂み、雑木林、assorted = 類別した、各種取りそろえた、釣り合った、調和した、copsee = coppice = 雑木林、cheap geta = 安ものの下駄、である。小学館のランダムハウス英和大辞典では copse = 雑木林 (thicket of small

広葉樹をめぐるロマン

木材には豊かなロマンがある。とくに広葉樹は個性豊かな樹木であるから、そのロマンも豊富で彩り豊かである。そのなかから道産広葉樹にまつわるいくつかの話拾ってみた。（北村）

いたやかえで

うっそうとした広大な樹冠を持つために、雨が降ってきても、その下に入れば雨に当たらない。板屋根を付けたようなものだ……ということから「板屋カエデ」と呼ばれるようになった。

北海道開拓秘録には、1885年

頃、円山や月寒に入植した岩手県出身の人達がイタヤカエデから甘味料を採取していたという記録が残っている。イタヤカエデはほかのカエデの3倍の糖量を持っている。

trees or bushes)，小さな森 (small wood) と出ている。

「雑木」には「いろいろな樹木」と「そまつな木」の二つの意味があるようである。「雑木」を「広葉樹」とする定義は一般の辞典には見られないようである。針葉樹文化の国では広葉樹を「良材とならない、そまつな木。たきぎ・炭などにする木」として「雑木」としたのかも知れない。材木屋の一般的な使い方では「雑木」は「広葉樹」を意味するようである。

北海道の雑木は良質広葉樹

かつて林務部の広報誌「林」に48回にわたって連載された岡田勝利氏の「北海道と雑木と私」の「雑木」は正に「良質の広葉樹」である。辞典にある「良材とならぬ」ではなく、「良材が得られる」木である。このエッセイの中で「広葉樹（当時は雑木と呼んでいた）の取り引きは、北洋材に比較すれば量的にも少なかったが、しかしまだ良材が豊富にあった時代であったし……」と書かれている。このように岡田氏の「雑木」は「良質の広葉樹」である。また、さきに引用した和英辞典の「雑木の下駄」についても書かれているので、少し長いが転載しよう。

「当時は、セン、カツラ、シナなどの軟質材が雑木の主体であった。需要の大宗をなしたのももちろん家具関係であったが、それに次ぐものとしては下駄とマッチの軸木材料であった。中略。道材のセン、シナ、ドロを原料とする、いわゆる雑木下駄を全国で最も多く生産したのは、現在の福山市松永町であり、つづいて徳島、大阪、名古屋、静岡の順であったと思う。九州の日田地方も

下駄の産地ではあったが、ここは松、檜^{ヒノキ}などを原料としたものであり、静岡も針葉樹を原料とした下駄の生産が多かったようである。

最初センの下駄が主体であり、次は価格の点からシナ中心となり、ドロの木も使うようになった。ドロはかんなが効かぬので手間賃が高かったが、大阪では南洋桐と称して一時は、かなり高く売れたものである。昭和十年頃には道材のドロだけでは供給が追いつかず、アメリカからコットンウッドを輸入するようになり、満州からも北満ドロを輸入したが、それほど下駄材の需要は旺盛で、おそらく最盛時には下駄に使われた木は道材だけでも50万石は下らなかつたはずである。

当時、小樽には確か村松商店といったと思うが下駄棒専門の大きな問屋があった。主としてセンの下駄棒を、セールスマンを使って全国的に販売していたが、いまなら輸出用のフリッチ、あるいはツギ板原料となる二尺上の立派なセンを、惜し気もなく全部下駄棒に製材していた。」

また、道産雑木の昔日の特長も述べられている。「センは小樽積、カツラは室蘭積と、内地の道材市場ではハッキリ格付けされていたが、室蘭積のカツラが良いのはいうまでもなく、日高産の緋カツラが室蘭経由で積出されたからである。カツラのほかに室蘭積でなければならぬものに、マカバがあった。沙流川流域から主として生産された材で、地質の関係か、非常に赤味の張ったマカバであり、赤味の色合が本当に惚れぼれとするほど冴えたピンク色であった。当時われわれは、これを噴火湾のマカバと称して別格扱いとして珍重していたのである。三越家具製作所などはこの噴火湾マカバの優秀さをよく知っており、高級家具には

やちだも



ヤチダモは森の中で最も背の

高い木である。それでフクロウは、この木の上で人間界に近づく悪魔を見張っている。

フクロウははじめはハルニレの木の上から下界の番をしていたが、だんだん人間が多くなり、目がとどかなくなったので、森

で一番高いヤチダモの木に移ったのだということである。

ヤチダモには雄と雌とがあり、雄は石目といって波状の木目がある。雌はヌカ目といい波状の木理がはっきりしない。また、試合用のバットにはならない。

特にこのマカバを指定してきたものである。当時はもちろん尺三寸上は全部角材として造材されたが、角面に美しい赤味が現れるほど赤味の多い材であった。いまならツキ板向き材として、業者から目の色を変えて争奪戦を演じられる最高品位のマカバであった。」

「斧の切れ味がいいと、はつられたばかりの木肌は滑らかですべすべとしており、木というものの本来の美しさを惜しみなく発揮している。特にセンとドロノキの木肌の白さ、美しさは抜群であり、カツラは栗色に陽焼けした肌を感じ、マカバは美しいピンクで、ほのかなお色気を漂わせ、見れば見るはどうっとりと見惚れる、雑木そのものの持つ自然の美しさである。まさに、大地が長い年月をかけて見事に創り出した山の芸術品というべきであろう。」

「当時の雑木の用途としては、大きくは造船、車両から細かくはペン軸、妻楊枝の類にいたるまでずいぶん広範囲に使われてきたが、量的にはマッチの軸木、下駄、家具、それに枕木であったと思う。中略。家具といっても筆筒とか机といった和家具が主体で、職人の手作りが多かったから、加工が容易なセンが最も多く、一部にキハダも使われた。長持用には特にヌカセンの二尺上選木が要求された。上等は桐であり、安物はモミの木を用いたが、センの長持は中級クラス用だったと思う。当時は白糠あたりから生産されるヌカセンが最も狂いの少ない良材とされ、日高産のセンは偏平材が多く安物の用途にしか使われなかった。

その当時のセンには相当大径木が多く、三尺上材も珍らしくなく、それらの良材は銘酒の看板、床の間の地板、変わったところでは太鼓の胴とし

て高く売れたものである。元コロ材で空洞のある材などは、太鼓の胴として最も適材であった。私がお今日までにとり扱ったセンの中で、最も巨大な材は、長さ六尺、径は四尺一寸×四尺四寸で、北見の興部で生産された材と記憶しているが、これは大きいばかりでなく玉杵があり、素晴らしい材であった。現在、道産広葉樹を代表する材はいうまでもなくナラであるが、その当時としては最も用途の広がったのはセンであったと思う。」

以上引用が非常に長くなったが、岡田氏の記述から広葉樹資源豊富であった時代の木材業者の活躍ぶりや儲けぶりがしのばれ、また相当にもったいない資源の使い方をしたものだと思われされる。

ナラのインチ材

北海道の明治年代に建てられた建物のうち、北大クラーク会館の南側にある清華亭の大梁にヤチダモが使われている。また、解体された小樽の古い建物にも同じくヤチダモが使われていた。ニシン御殿にもセンが大梁に使われており、構造材は針葉樹のみでなく、断面の大きい梁をヤチダモやセンという樹幹通直の樹種から採材したことがあった。ニシン御殿のセンの大梁はその木目模様からケヤキに似せたのかも知れない。

明治時代にはヤチダモやセンに比べ、ミズナラの評価は低かった。平地には広葉樹が多かったので、開拓においてはナラは邪魔ものとされた。火を付けても針葉樹のように燃えず、伐採しても跡に萌芽するし、薪としてもアサダ、イタヤなどより斧で割りにくく、炭にすれば火をはじく、というようにナラの評価は低かった。日清戦争後、朝鮮半島から旧満州に鉄道をひくため、クリやヤチ

かつら

カツラの赤い木の芽が春風に吹き飛ばされて水たまりに落ちた。これが魚になってカジカ・鯀と名付けられた。カジカが尻無川にいるのはそのためだ……というアイヌ伝承がある。

古事記にもカツラがでてくる。おとぎ話としてよく知られている「海彦・山彦」のはなしである。火おりの命（山彦）は兄の火てりの命（海彦）から借りた釣針を求めて海神の宮殿に行く。

その宮の御門の傍の井戸のほとりに立派なカツラの木があり、命はその木に登って待っていた。……そして、やがて海神の娘豊玉ひめと結ばれることになる。

ダモとともにミズナラも8尺枕木として輸出され、さらに日露戦争後には旧満州の奥地まで鉄道敷設の権利を得て、この枕木が主として北海道から輸出された。さらに、欧米各地にまでも道産広葉樹の枕木が輸出されるようになった。

この時代に欧州に輸出されたミズナラ心去り材の枕木が製材されオークの家具材として使用されていることがわかった。加留部善次氏によると、英和辞典では oak = カシ、独和辞典では Eiche = カシワとなっており、欧州で好まれるオークやアイヘがミズナラと同等のものとは知らなかったということである。そして大正3年、第一次世界大戦が始まるまで、ナラのインチ材として小樽港からナラ材が大量に欧州に輸出された。このナラインチ材は第二次大戦後も大量に輸出され、道材合板、生糸とともに食糧難を救い、復興を助けた。

しかし、インチ材はナラ丸太からの良質部分の刺身で、加工度の極めて低いものである。これについて昭和25年に占領軍総指令部天然資源局林業部のトレーヤー氏がもっと加工度が高い製品を生産すべきであると勧告した。現在、インチ材よりもさらに加工度の低いセンやナラのフリッチが輸出されているのは悲しい気持ちにさせる。

雑木が銘木に

北海道の広葉樹材の主な用途はインチ材とドアスキン、壁などに使う内装用合板で、いずれも欧米諸国に輸出され、国内向けは極めて少なく、また入手も困難なぐらいで、国内は相手にせずという感があった。昭和40年を過ぎたころから、輸出にも波が出て、国内需要も開発しようということになった。昭和44年7月北大農学部で開催された

第19回日本木材学会大会のシンポジウムではこの趣旨に沿って「北海道産ナラ材の需要開発」をテーマとした。同じころ東京で開催された道産ナラの家具展が大変好評で、またこのころから旭川を中心とするナラ、カバなどの道産広葉樹材による家具の製造技術も向上し、品質の良い家具が生産されるようになり、道材突板を表面に張った「銘木合板」も出現し、これまでの「雑木」が一挙に「銘木」となった。ニレはガマ割れ（輪裂）が多く、また水分変化による伸縮が大きく、狂い易いので、薪にしか使われなかったが、これも銘木の仲間入りし、突板として使われるようになった。ニレはケヤキと同じくニレ科のため、木目模様が似ており、塗装を工夫すれば、ケヤキのように見え、銘木の仲間入りができるようになった。

道材銘木市ではミズナラ、マカバ、セン、アサダ、ヤチダモなどの良質広葉樹大径丸太が並べられている。雑木が銘木となった証拠である。

これからの広葉樹利用と資源

かつて優良広葉樹が豊富にあった北海道の森林にもその資源は大きく減少した。統計で見ると限りではあまり大きな減少ではない。しかし、ミズナラ、セン、カツラ、ニレなどが大きく減少し、またヤチダモはもともと蓄積の少ない樹種で、それがさらに減っている。「林」59年12月号の古田昭司氏の「数字でみる林業・林産業とその発展方向」で、昭和23年と57年の蓄積が対比され、数字と質の内容が論ぜられている。資源の量的、質的变化については古田論文を参照していただきたい。

ここで、上述のナラ以外の樹種について、その利用の経過について述べてみよう。

せんのき



ハリギリとも呼ばれるが、葉がキリに似ていて、枝にトゲがあるからである。

あるからである。

下駄の材料としてよく知られているが、センが下駄に使われ始めたのは、大変古いことのように、弥生時代後期の遺跡から、センで作った「田下駄」が発掘されている。

オニセンとヌカセンがあって、

オニセンの方は年輪幅が広く、堅くて重い。石せんともいわれて下駄には向かないという。ただし、今ではセンが下駄に使われることはまれで、大抵はシナノキが使われている。

ブナ 世界的に広く分布する。わが国では北海道の長万部、黒松内、寿都を結ぶ線を北限とし、南は鹿児島県高隈山まで分布し、広葉樹として蓄積の最も多い樹種である。腐れ易いことから、あまり高度な利用はされず、一部の地方で漆器の素地、足駄の歯、しゃくし、工具の柄などに用いられていた程度で、大部分は薪炭材であった。木材乾燥技術の普及により、フローリング、合板、家具材としての利用が進んだ。とくに曲げ木特性が優れていることから家具材として重要な木材である。道南のブナもはじめは邪魔物扱いで、パルプ材として大量に伐採された。そして資源がなくなつてから、その有効利用が唱えられている。

このブナの利用ではデンマークでみた低質ブナ材からの高級フローリングの製造が印象的であった。これは製造技術開発も称賛されるが、それより基本的なものの考え方にあると感じた。詳細は「木材の研究と普及」1977年11月号を参照されたい。

道南ではトドマツなど植えずにブナの育林を考えるべきであろう。

カバ類 戦時中に軍需材として大量のマカバの良材が伐採された。マカバは戦前においてもサクラとして使われたが、現在はダケカンバも含めて高級家具材である。北方のトドマツ造林地で、マカバが侵入してきたので、伐らねばならない、という話を聞いた。カバとトドマツの価値の差は明瞭であるが、造林費をかけたトドマツを育成しなければ会計検査員から叱られる、という。広葉樹の育成とはむずかしいものである。

アオダモ 最近にわかに野球のバットが折れて困るという苦情が出、さらにその原材料であるア

オダモの資源問題がクローズアップされてきた。アオダモはその力学的性質が運動用具の材料として適しているため、アメリカから輸入のヒッコリーに匹敵する優れた材とされてきた。しかし、伐るだけで、その資源の保続、育成は全く考えられていなかった。最近の調査では胸高直径8cm以下がほとんどで、バット材が採材できる太さのものは極めて少ない。なぜ太いアオダモはないのだろうか。何も分かっていないというのが現状である。

ハリギリ (セン) 欧米諸国で好まれる木材である。樹幹通直で、生長も速いことから育成を試みてほしい樹種である。

ニセアカシア、**シンジュ** (ニワウルシ) とともに生長の速い外来広葉樹である。ha当たり300~400本植栽し、樹形を整えながら育成すれば、用材林となり、また樹形の悪いものは、薪になる。広葉樹の植栽本数は8000~12000/hと教科書に書いてあるから、といて密植したがる傾向にあるが、除・間伐とそのあとの萌芽をどのように処理するのか、心配となるところである。

あとがき

昭和29年に全道で生じた2200万m³という大風害木の処理後、小径広葉樹を皆伐し、主にトドマツを植栽しようという「質より量」の林力増強計画が32年に出された。これをテーマのシンポジウムで、広葉樹も育成すべきであるといったら、笑われ、「林」の「ねんりん」で罵倒された経験がある。そして27年後、広葉樹、広葉樹といわれている。感慨無量である。

(北大農学部林産学科)

あおだも



ヨーロッパでは魔力を持った「おまじない」の木として知ら

れている。

この木はイボを治すと信じられていたり、子供が脱腸やクル病になると、この木の若木を二つに割ってその間をくぐらせ、また元に束ねなおすと病気が治る、という古い言い伝えがある。

大変よく燃えるので、山子の間では「山の神の松明」とも呼ばれている。アオダモの「アオ」は樹皮をとって水に漬けると青くなることから来たらしい。染料にもなるし、アイヌはこれをイレズミに使った。